

ジャーナリズムとプロパガンダの間⁽¹⁾ —第二次世界大戦時の英国における「真実」のマネジメント—

津田 正太郎*

1 はじめに

1942年3月14日、英國の作家ジョージ・オーウェルは、自らの日記に「すべてのプロパガンダは嘘である。たとえ真実を語っているときでも」という有名な言葉を綴っている（オーウェル2010: 391）。

この言葉は当時、英國放送協会（British Broadcasting Corporation: BBC）のインド向け放送業務に従事していたオーウェル自身について述べたものである。同放送のニュース解説においてオーウェルは、自身ではそう信じていないにもかかわらず、日本がソ連を攻撃する意図を有していると強調していた。オーウェルによれば、もし日本が実際に攻撃を行ったなら自らの主張の正しさを裏づけることができるが、攻撃しなかったとしても日本がソ連をひどく恐れている証拠とすることができます。あるいは逆に、ソ連が日本を攻撃したとしても、先に攻撃を仕掛けたのは日本側だと偽ることが可能だという。つまり、オーウェルの主張通りになった（=真実であった）としても、結果的にそうなったにすぎず、そなならなかったとしても言い逃れや歪曲の余地があるために大きなダメージにはならない。プロパガンダが蔓延する状況においては、ある言明が正確か否かはもはや重要ではないというのがオーウェルの認識だったと言いうる。

プロパガンダが横溢し、人びとの利害を超えたところに万人に受け入れられる真実が存在するなどとはもはや信じられなくなった世界において、人びとの拠り所になるのは「自分にとっての真実」でしかない。再びオーウェルの言葉を引くならば、「誰もが、ただもう、自分の言い分を述べ、相手の観点を意識的に無視し、さらに、自分と自分の友人以外の人間の悩みに完全に無感覚だ」という（前掲書: 401）。そこでは同情心すらもがきわめて選択的、恣意的に発揮され、自分たちの利害にかなう人びとの苦しみには強い憤りを表明する人物が、そうではない人びとの苦しみには全くの無関心になるといった事態が頻発する。

こうしたオーウェルの発想が、自身で体験したスペイン内戦における虚偽的なプロパガンダの氾濫から影響を受ける一方、第二次世界大戦後に執筆された小説『1984年』の世界観へと結実していったと考えることは的外れではないだろう。オーウェルは『1984年』のある登場人物に「党が真実だと主張するものは何であれ、絶対に真実なのだ。党の目を通じて見る以外には、現実を見ることはできない」と語らせているが（オーウェル 1972: 324）、これはまさに国家の支配エリートが、自らの利害に沿って何が「真実」で、何がそうでないのかを決定してしまう世界なのである。

このようにプロパガンダと「真実」とを結びつける語りは、オーウェルにのみ見られるわけでは

*つだ しょうたろう 法政大学社会学部 教授

ない。当時の BBC で国内向けニュース編集を担当していた R.T. クラークも「士気を高めるに値する人びとにそうさせるための唯一の方法は、彼らに真実を、たとえそれが恐るべきものであっても、真実だけを伝えることだと私には思える」と述べ (Hickman 1995: 23)、「真実」のプロパガンダ的価値を強調している。さらに、BBC ドイツ語放送に関わったのち、連合国派遣軍最高司令部 (Supreme Headquarters Allied Expeditionary Force : SHAEF) で心理戦争に携わったリチャード・クロスマンも「戦争中、われわれは真実こそが最良のプロパガンダであることを発見した」と論じている (Crossman 1949: 324)。

しかし、クラークであれクロスマンであれ、彼らの語る「真実」と、オーウェルが言う「真実」との間には、かなりのニュアンスの違いがあるように思える。クラークの引用文からも明らかのように、彼らが語る「真実」とは「自分たちにとって都合の良い真実」とイコールではない。クロスマンにしても、先の引用文に続けて「誠実さを失った人びとは、自身のでっち上げを信じるようになる」という理由からだけでも、自らを破壊してしまう」と述べている (前掲論文: 324)。「都合のよい真実」ばかりを創作し、それを広めようとする態度は、人びとの不信感を招くのみならず、自分たちが置かれた状況を客観的に把握することを困難にしてしまうというのである。

それでは、クラークやクロスマンが語るような信頼重視型のプロパガンダとジャーナリズムとを区別することはできるのだろうか。その基準としてまず考えられるのが、客観性の有無である。以下で論じるように、オーディエンスからの信頼を重視すると言えども、第二次世界大戦において BBC や同局を所管していた情報省は戦争の当事者にほかならず、英独間の関係を客観的に伝えるべきといった発想は皆無であった (Stourton 2017: 7)。プロパガンダの目的はあくまで戦争の勝利だったのである。対して、ジャーナリズムを「狭義には…事実に基づくという意味での正確性、歪曲や偏向がないという意味でのバイアスの欠如、ニュースと論評との分離を含み、さらに広義にはニュース・ソースの透明性や当事者にならないことを含」むという意味での客観性を目指す営みだとするなら (大井 2003: 129)、一応の区別は可能であるように思われる。

しかし、客観性の有無という観点からプロパガンダとジャーナリズムとを区別しようとしても、それほど容易ではないことがすぐに理解される。たとえば、クロスマンは次のような主張を行っている。

(ニュース選択や情報提示の方法が重要だという：引用者) 点において、プロパガンダの技術は、ポピュラー・ジャーナリズムのそれと同じである。両者の違いは、語りかけられる公衆がプロパガンダに対してはかなり懐疑的で批判的な態度を示すという点に求められる。逆説的なのに、プロパガンダ担当者は、民主主義のもとでのジャーナリストよりもかなり高い水準の客観性を達成せねばならず、「真っ直ぐなニュース (straight news)」という規範により厳格に従わねばならないのである。 (Crossman 1949: 342)

すなわち、プロパガンダを成功させるためには、当時の英國のジャーナリズム以上の客観性が求められたというのである。

他方で、先に引用したような意味での客観性は、そもそも実現不可能な目標でしかないということも指摘されてきた (大井 2003: 136-139)。こうした観点からすれば、出来事の選択や解釈などの

面でジャーナリズムが主観的な営みにしかなりえない以上、意図的に虚偽を報じるのは論外としても、自身の主観性や偏向を認めたうえで情報を提示すべきだという見解も導かれうる（大石 2017: 122-123）。この見解に依拠する場合、プロパガンダとジャーナリズムとの間に境界線を引くことはさらに困難になる。プロパガンダであれジャーナリズムであれ、情報の提示を通じて特定の世界観へとオーディエンスを誘う点では違いがないことになるからである。

本論の目的は、クラークやクロスマンらが語る信頼重視型のプロパガンダと、主観性を織り込んだジャーナリズムとの間に境界線を引くことは果たして可能なのかを検討することにある。それにあたって本論では、第二次世界大戦時における英國政府のプロパガンダ政策に注目し、そこで「真実」のマネジメントがいかに行われていたのかを論じる。そこから具体的な事例として1940年5月から6月にかけて展開されたダンケルクの撤退戦に関する報道を取り上げる。そのうえで、先の問題提起について改めて検討することで本論の結びとしたい。

2 英国政府による「真実」のマネジメント

1943年11月末、当時の英國首相ウインストン・チャーチルは、テヘランでソ連のヨシフ・スターリンと会談した。その席上、枢軸国側に対して虚偽情報の拡散を行っていると語るスターリンに賛同したチャーチルは「戦時においては、真実は非常に貴重であるがゆえに、それは常に虚偽の護衛に付き添われなければならない」と述べたという（チャーチル 1984: 117）。これは「真実」にたいするチャーチルの考え方を端的に示した言葉だと言うことができる。チャーチルの発想からすれば、非常時における情報とは敵対者を攻撃するための武器にほかならず、虚偽や歪曲を気にする必要はなかった。むしろ、敵と正面から対峙するよりも欺くことで勝利を収めるという発想は、チャーチルに強く訴えかける部分があったと言われる（Rankin 2008: xvi）。

第二次世界大戦においてチャーチルのこうした発想が強く現れたのが、いわゆる「ブラック・プロパガンダ」にたいする彼の姿勢である。1940年5月に首相に就任したチャーチルは、BBCや同局を所管する情報省に対しては冷淡な態度を示し、発信元を明示しながら行われる「ホワイト・プロパガンダ」の効果も信じていなかったとされる（Briggs 1970: 3）。他方で、枢軸国やドイツの被占領地域の放送局を偽って展開される「ブラック・プロパガンダ」には強い関心を示し、それによって敵の混乱や士気低下を狙う計画を積極的に支援していた（Balfour 1979: 99）。英國のブラック・プロパガンダにおいて中心的な役割を果たしたセフトン・デルマーの「偶然に嘘をつくな。意図的に嘘をつけ」という言葉に示されるように（Briggs 1970: 433）、一時的な運用を前提とし、長期的な信頼の確立を考慮する必要がなかったブラック放送局は、虚偽の情報を意図的に発することで作戦遂行の促進、円滑化を目指していたのである。

よく知られている事例を挙げるなら、大戦末期にドイツ本土への侵攻を準備するSHAEFは、BBCやアメリカの声（Voice of America: VOA）などを通じて同国的一般市民に自宅へ留まるよう指示した（Crossman 1949: 325; Delmer 1962: 233-240）。避難を促すと混乱が生じ、連合国軍の作戦行動に支障をきたしかねないと考えたからである。ところが、SHAEFを訪問したチャーチルは偶然にその方針を知り、ドワイト・アイゼンハワー司令官に変更を促した。一般市民が避難をするよう誘導し、それに伴って生じる混乱でドイツ軍のコミュニケーションを妨害すべきだというの

である。しかし、BBC や VOA がいったん発した指示を翻すならば、それらの放送局の信頼性が傷ついてしまう。そこで、デルマーが指揮するブラック放送局が、ナチスによる放送を偽って避難を呼びかけたとされる。

このようなブラック・プロパガンダに対して、英國のホワイト・プロパガンダの主要な担い手であった BBC は批判的な態度をとっていた (Briggs 1970: 434; Balfour 1979: 99)。ブラック放送局の存在によって、BBC の信頼性までもが損なわれてしまうのを危惧していたからである。たとえば、情報省に近い筋から「アドバイザー」として BBC に派遣されていたアイヴォーン・カーケパトリックは、BBC が外国語放送を行っていた中波帯域でブラック・プロパガンダを展開するというデルマーのアイデアに反対して次のように述べたという。

短波放送であれば、ブラックも問題ない。だが、中波帯域で貴君の嘘や歪曲をまき散らせば、眞実の提供者としての英國のプロパガンダの通貨価値をすべて切り崩してしまだらう。
(Stourton 2017: 352)

もっとも、ここで言われているような「眞実」が「客觀性」に依拠したものでないことは先に指摘した通りである。戦争勃発直後の 1939 年 9 月 13 日、情報省から内務省に送られたメモのなかで以下のように語られる「眞実」は、この点を的確に論じていたとみることができる。

検閲されているということがわかっているラジオや新聞を、大部分の人びとは信頼しないということが理解されねばならない。…その他の点では政府を攻撃しているのであれば、彼らのプロパガンダとしての価値は実際には向上すると言っても過言ではない。…人びとは自分たちに眞実が語られていると感じなくてはならない。不信感は、逆境に関する知識よりもはるかに大きな不安を引き起こす。広報が達成すべきもっとも重要なことは、最悪の事柄が周知されないと確信させることなのである。…しかし、眞実とは何か？われわれは実践的な定義を採用しなくてはならない。眞実とは、眞実だと信じられるものなのである。騙し通せた嘘は眞実になるのであり、したがって正当化されうる。その難しさは嘘をつき続けることにある。…眞実を語り、それに足る十分な緊急事態が生じた場合にのみ、そのときになら信じられるであろう大きな、途方もない嘘を一つつくほうがより容易だろう。(McLaine 1979: 28)

この引用文は、英國のプロパガンダ戦略における重要なポイントを示唆している。まず一つは、状況に応じて意図的に虚偽を発信することも厭わないが、それを続けることは困難であるがゆえに、なるべく「眞実」を語るべきだという姿勢である。人びとを欺き続けることが困難であった要因の一つに、ドイツのプロパガンダ放送との競合があった。第二次世界大戦が勃発する以前からドイツと英國は多言語放送によってそれぞれプロパガンダを展開しており、正確な情報を渴望する人びとはそれらを比較しながら聴取していた。そのため、敵国によって発せられた情報を隠蔽することは無意味であり、信頼性を損なうだけだという判断に基づき、英國のマスメディアには敵国のコミュニケーションを報道することが許されていた (Taylor 1999: 162)。しかも、英独のいずれも相手側の放送を録音し、それを使って敵の矛盾や虚偽を暴露するという番組制作の技術を用いていたことから、虚

偽に基づく放送が逆効果になってしまう可能性は高かったのである。

先の引用文においてもう一つ興味深いのは、政府に対する批判を許容することでプロパガンダが「真実」だという感覚が強まるという指摘である。第二次世界大戦中、英國では軍事機密の漏洩を防止するために検閲制度が実施され、「敵の利益となる情報」や「戦争遂行の妨げになる報道」には罰則が課せられることになった (Curran and Seaton 1997: 60-67; Williams 1998: 142-143)。戦局が悪化していくなか、規制や罰則の強化が図られ、英國共産党の機関紙『デイリー・ワーカー』が約一年半にわたって発行禁止処分になる一方、戦争遂行方針をめぐって政府を厳しく非難していた『デイリー・ミラー』などの新聞には政府からの強い圧力がかかることになった。それでも、検閲自体は強制ではなく、判断に迷った場合に新聞社の側が当局に相談するかどうかを決めるというものであり、戦争自体を否定しない限り、政府批判の余地はかなり残された。加えて、新聞が告発される場合でも、第一次世界大戦時には新聞の側が自らの無罪を証明せねばならなかったのに対して、第二次世界大戦時には政府の側がその新聞が敵国に利益を与えたことを証明しなくてはならないとされた (Taylor 1999: 172)。新聞に対してこのような独立性が許容された理由としては、報道の自由こそがナチスから英國が守ろうとしている同国の伝統、または民主主義の一部だと考えられていたということがあったと指摘されている (Curran and Seaton 1997: 67)。

しかし、新聞社にたいする検閲が限定的であったもう一つの理由として、マスメディアによって伝えられる情報がその源泉の部分ですでに検閲を受けていたということが指摘されている (Pronay 1982: 177-178; Taylor 1999: 160-162)。すなわち、戦地に派遣された特派員が英國本国に記事を送るさいにすでに検閲を受けていたことに加えて、世界中から同国へと電信網によって送られる情報はすべてプレス・アソシエーションのロンドン本部を経由することになっており、そこで検閲が行われていたのである。したがって、新聞社、BBC、ニュース映画会社または海外のマスメディアへと伝えられる情報の大部分はすでに検閲済みの状態であった。各新聞社が同一の情報から多様な記事を書き、BBCは異なる伝達形態でそれと同じ情報を伝えることで、表面的な報道の多様性は維持されていた。プロパガンダ研究者のフィリップ・テイラーはさらに、新聞社がときに検閲に異議を唱える記事を掲載し、新聞と政府との対立が読者に知らされることで、当時の英國のマスメディアが実態以上に権力から自由な存在であるかのような印象が生み出されたと指摘する。「メディアが検閲についてあまりに理解を示すなら、このゲームは終わってしまうだろう」というのである (前掲書: 154)。このように、新聞社が表明する「意見」の部分でかなりの自由が許容することで、それ以外の部分で伝えられる情報が「真実」として受け入れられることが期待されていたのである。

ただし、英國政府によるこうした「真実」のマネジメントが戦争開始直後からスムーズに行われていたわけではない。むしろ、英國政府の情報管理は当初、大きな混乱にみまわっていた。1940年4月から5月にかけてのノルウェー上陸作戦では、英國軍の撤退が決定された数日後にBBCが楽観的な報道を行うことでその信頼性を大きく失墜させたと言われる (Hickman 1995: 25; Knightley 2000: 248)。さらに、機密情報の漏洩阻止に力点を置く消極的な姿勢が、豊富な情報提供によって自国の肯定的なイメージを広げようとするドイツの積極的なプロパガンダ方針の前に遅れを取っていたとも指摘されており (Pronay 1982: 181-182)、失敗を通じてより洗練されていったとみるべきであろう。そこで次に、フランス北部のダンケルク海岸からの撤退作戦にかんする報道

に焦点を当てることで、「真実」のマネジメントについてより詳細に論じるとともに、信頼重視型のプロパガンダとジャーナリズムとの間に境界線を引くための手がかりを探すことしたい。

3 「大きな物語」としてのダンケルク

クリストファー・ノーラン監督による映画『ダンケルク』（2017年）は、1940年5月末から6月初旬にかけてのダンケルクからの英仏軍の撤退作戦を描き、全世界で5億ドル以上の興行収入を獲得するとともに、アカデミー賞で8部門にノミネート、3部門を受賞した。この映画の特徴の一つは、ドイツ軍の猛攻に耐える英國海外派遣軍（British Expeditionary Force: BEF）の名もなき兵士や英國空軍パイロット、小さな船で彼らの救出へと向かう民間人の姿に焦点を当てることで、第二次世界大戦は「人民の戦争（People's War）」であったという英國の集合的記憶を忠実になぞっている点にある。すなわち、第二次世界大戦の勝利は、チャーチルやモントゴメリー将軍のようなカリスマ的指導者のみならず、一般の兵士や市民の勇気と団結によってもたらされたという「物語」がこの映画のベースにあると言ってよい。

実際、こうした「ダンケルク精神」の称揚は、戦後においても英國の危機のさいにはしばしば行われ、英國のナショナル・アイデンティティの一部になっているとすら言われる。マーク・コネリーによれば、ダンケルクの神話化は、英國のより古い集合的記憶と接合されることで、撤退戦が完了した直後から生じていたという（Connelly 2004: 60-62）。すなわち、16世紀後半のスペイン無敵艦隊や19世紀初頭のナポレオンなど、強大な敵が現れたとしても、最終的には勝利を収める國民共同体（nation）としての英國のイメージが喚起され、ダンケルクの顛末もその一部として語られるようになったというのである。コネリー自身の言葉を借りるなら、「英國の神話、伝説、そして歴史の脈絡と結びつけられることで、ダンケルクは急速に古代の出来事のオーラをまとい、あたかも数世紀前の出来事と区別するのが不可能であるかのようになった」という（前掲書: 62）。言わば、英國人とはいかなる存在なのかを語る「大きな物語」の一部となつたのである。

しかし、第二次世界大戦が勃発した当初、こうした物語化のために必要な条件は整っていなかつたとみるべきだろう。BEFがフランスに移動するにあたってはBBCや新聞社の記者が随行し、そこには海外メディアの特派員も含まれていたものの、実質的な報道がほとんど不可能なほどに厳重な検閲体制が敷かれていた（Knightley 2000: 239-242）。それに対して、ドイツは中立国の特派員にも積極的に報道の素材を提供し、多くの記者たちが情報を求めてベルリンへと向かったという。BEFとともにフランスに渡ったBBCの記者は、あまりの退屈さに転勤を願い出たため、ドイツによるフランス侵攻が始まる前に中東に異動している（Stourton 2017: 68）。フランスにとどまったく記者たちも、ドイツ軍による侵攻によりBEFやフランス軍が極度の混乱に陥るなか、放置されてしまったために英國に帰還し、撤退戦時のダンケルクに英國の記者は一人もいなかった（Harman 1990: 267; Knightley 2000: 253）。フランスの映画会社パテ所属のカメラマンが一人いたものの、避難活動の支援に忙殺されており、英國のプロパガンダに活用できそうな映像や写真はきわめて乏しかった。

にもかかわらず、敗北と撤退が成功の物語へと成功裏に転換された要因としては、帰還した兵士たちの士気の高さを報じる当時の新聞報道と並んで、BBCのトーク番組『ポストスクリプト』の

役割が大きかったとされる (Connelly 2004: 75)。撤退が終了した直後の 6 月 5 日、番組に出演した脚本家の J.B. プリーストリーは、兵士の救出の途上で撃沈された『グレイシー・フィールズ』という外輪船を取り上げている。有名女優と同じ名前を有するこの船はかつて、ポートマスとワイト島との航路を結ぶ連絡船であった。プリーストリーはこの船について、次のように述べた。

(われわれが『グレイシー・フィールズ』に乗船することは二度とないが：引用者) この小さな蒸気船はいまや、他の全ての勇敢でぼろぼろの姉妹たちとともに、不滅となった。彼女はダンケルクの叙事詩において長き年月を渡っていくことになるだろう。そして、われわれの曾孫たちは、われわれがいかにして敗北から栄光をもぎとることでこの戦争を始め、そこから勝利を勝ち取ったのかを学ぶとき、この小さな休日用の蒸気船がいかにして地獄へと赴き、栄光とともに帰還したのかもまた学ぶことになる。(Priestly 1940: 4)

こうしたプリーストリーの語りに対しては「ロマンチックすぎる」「非現実的である」「感情的だ」といった聴取者の反応がみられたものの (Mackay 2002: 181)、その放送はダンケルクの記憶とともに長く記憶されることになる。プリーストリーを超える影響力を發揮できるのはチャーチルだけだと評価すら行われるようになったのである (Stourton 2017: 123)。『ポストスクリプト』はもともと、BBC がドイツによる対英プロパガンダに対抗するべく、人びとの生活とより深く結びついたメッセージを発する番組として考案されたものであった (Briggs 1970: 146)。その意味では、検閲によって情報を制限するのみならず、効果的なメッセージの発信によって人びとの説得を試みる積極的なプロパガンダの先駆けであったとみることが可能である。

だが、ダンケルクをめぐる物語がプロパガンダの一部である以上、その物語には回収されない部分が数多くの存在していたことは否定できない。上記のプリーストリーの語りについて言えば、撤退戦が行われた時点で『グレイシー・フィールズ』はすでに海軍によって掃海艇として接収され、軍船として利用されていた (Harman 1990: 181)。かつて連絡船として使用されていたことは虚偽ではないが、その部分が強調されることで、民間の船舶が兵士たちの救出に向かい、そこで犠牲になったという構図が強化されているのである。さらに言えば、ダンケルクでの救出作戦において大部分の兵士たちは海軍の船舶によって英国まで輸送されており、民間船が利用されたのは 8 日間の作戦期間のなかの最後の 2 日間にすぎない (前掲書: 203-204)。

加えて、困難な時期における勇気と団結を示すとされる「ダンケルク精神」にそぐわない出来事が多々生じていたとも言われる (前掲書: 220-221; Knightley 2000: 255)。映画『ダンケルク』ではその一部が描かれてはいるものの、ドイツ軍が迫るなかで、命令がないのに撤退したために射殺された BEF の指揮官や、満員のボートに無理やり乗船しようとしたために乗船者に射殺された士官、砂浜に掘った穴から出てくることを拒絶した上級士官もいたとされる。また、ダンケルクから帰還した兵士たちは士気が高く、すぐにフランスに戻って戦うことを希望していると報じられたものの、実際にはドーバーを離れる列車のなかから帰還兵たちが所持していたライフルを投げ捨てる様子なども目撃されている (Williams 2010: 176)。

もっとも、仮に英国の記者がダンケルクにいたとしても、上述したような「ダンケルク精神」にそぐわない逸話が報道されたかどうかは定かではない。先に述べたように、第二次世界大戦当時の

英國において各新聞社は戦争遂行の方法について政府を批判することはあっても、戦争そのものに対する対応は協力的であり、国民の士気を低下させかねない上記のような逸話が報道されたとは考えづらい。むしろここで興味深いのは、フランス軍に関する扱いである。フランスから帰還した記者たちはその直後、BEFのインテリジェンス部門の士官によってロンドンのホテルに招集され、BEFの危機について「フランス軍の失態を非難するよう」指示を受けたのだという (Harman 1990: 268)。実際にそうした報道が行われたと考える根拠は乏しいが、ダンケルク撤退戦が英國の「大きな物語」へと接続されていくなかで、フランス軍の役割が軽視されるようになったことは否めない (前掲書: 65; Knightley 2000: 255)。リールに駐留していたフランス軍がドイツ軍を足止めすることで撤退が可能となる時間的余裕が生み出され、また撤退を支援するためにフランス海軍は英國海軍とほぼ同程度の損害を被ったにもかかわらず、ダンケルク撤退戦は「英國の奇跡」とみなされるようになったのである。

以上のように、ダンケルク撤退戦は、より積極的なプロパガンダが展開されるようになるなかで、英國の「大きな物語」へと組み込まれていった。ただしそれは、プロパガンダによって人びとが一方的に説得されたというよりも、人びとの間でこうした「物語」にたいする強い願望があったからだと言わねばならない。また、「大きな物語」の一部、あるいは神話であることと虚偽であることとは同義ではない。この戦いにおいて語られる様々な事柄の多くは実際に起きたことであり、虚偽的なプロパガンダだとは言い難い。だが、それらは「大きな物語」と接合可能なように選択、記述、記憶されてきた一面的な「真実」である。そしてこの点にこそ、たとえジャーナリズムが主観的な営みであったとしても、信頼重視型のプロパガンダと差異化しうる要素を見出しうるのではないだろうか。最後に、この点について検討することで、本論の結びとすることにしたい。

4 おわりに

ルポライターの辺見庸は、「反逆する風景」というエッセイのなかで、フィリピンの残留日本兵の人肉食について現地の老人に話を聞いているさなか、その場の雰囲気に全くそぐわない真っ赤な背広を着た男が唐突に現れたという逸話を紹介している (辺見 1997: 29-30)。辺見はその取材記事を執筆したさい、赤い背広の男のイメージが鮮烈に焼き付いているにもかかわらず、結局は文章にしなかったという。だが、辺見はそれを悔いており、「趣旨に、意味に、文章に整合しないからこそ、数行なりとも盛り込まなければならなかったのだ」と述べている (前掲書: 30)

筆者なりに解釈するなら、ジャーナリストは取材のさなかにあって、自らのテーマに沿って周囲の世界を意味づけようとする。ところが、世界は往々にして意味づけを拒み、それと全く対応しない風景をジャーナリストに見せつける。それこそが「反逆する風景」であり、特定の意味づけによって世界を塗りつぶそうとする行為の傲慢さを突きつけるのである。辺見はジャーナリストがこうした特定の意味の世界へと自己を閉ざしていく危険性にたいしてきわめて敏感な書き手である。

本論で注目してきた信頼重視型のプロパガンダは、説得力の確保を目的として可能な限り虚偽を避けようとしていた。しかし、それがプロパガンダである限り、情報源の厳しい統制に服していたことに加え、自らが依拠する世界観、言い換えれば「大きな物語」に合致しない出来事を切り捨てるのをえなかった。プロパガンダは「反逆する風景」を許容できないのである。

無論、ジャーナリズムであっても、紙幅や番組時間に限りがあり、また受け手にとっての理解しやすさを考えるなら、「反逆する風景」を取り込むことは容易ではない。あるいは、ダンケルクの物語が「必要な神話」だったと言われるように (Harman 1990: 13)、国家の存亡がかった総力戦のもとでそれにそぐわない報道をするべきだという要請は現実的ではないとも考えられよう。だがそれでも、信頼重視型のプロパガンダと、自らの主觀性を認めるジャーナリズムとのあいだに何らかの差異を見ようとするのであれば、自らの語りや「大きな物語」とは調和しない、何らかの要素を許容しうる点にそれを求めねばならないのではないだろうか。一つの記事や番組では不可能であったとしても、何らかの語り直しが可能な余地をどこかに残しておくことがジャーナリズムには求められるのではないだろうか。逆に言えば、「反逆する風景」を許容しないジャーナリズムは、「真実」を重視するプロパガンダとなんら変わることがないのではないだろうか。

注

- (1) 本研究を実施するにあたり、公益信託高橋信三記念放送文化振興基金から研究助成をいただいた。ここに謝意を表したい。
- (2) 戦争開始直後の情報省の混乱については、津田 (2018) を参照のこと。

参考文献

- オーウェル、G.、新庄哲夫 (1972) 『1984年』早川書房。
- 、デイヴィソン、P. 編、高儀進訳 (2010) 『ジョージ・オーウェル日記』白水社。
- 大井眞二 (2003) 「コミュニケーションとジャーナリズム 客觀性原理のレリバンス」(鶴木眞編『コミュニケーションの政治学』慶應義塾大学出版会。
- 大石裕 (2017) 『批判する / 批判されるジャーナリズム』慶應義塾大学出版会。
- チャーチル、W. 佐藤亮一訳 (1984) 『第二次世界大戦4』河出書房新社。
- 津田正太郎 (2018) 「『聴く』プロパガンダ：第二次世界大戦時における英国のプロパガンダ政策（上）」(『社会志林』65卷3号、pp.25-54)。
- 辺見庸 (1997) 『反逆する風景』講談社。
- Balfour, M. (1979) *Propaganda in War 1939-1945: Organisations, Policies and Publics in Britain and Germany*, London: Faber and Faber.
- Briggs, A. (1970) *The War of Words (The History of Broadcasting in the United Kingdom Vol.III)*, London: Oxford University Press.
- Connelly, M. (2004) *We Can Take IT!: Britain and the Memory of the Second World War*, London: Routledge.
- Crossman, R. (1949) 'Supplementary essay,' in D. Lerner, *Psychological Warfare against Nazi Germany: The Sykewar Campaign, D-Day to Ve-Day*, Cambridge: MIT Press.
- Curran, J. and Seaton, S. (1997) *Power without Responsibility: The Press and Broadcasting in Britain (5th edition)*, London: Routledge.
- Delmer, S. (1962) *Black Boomerang*, New York: The Viking Press.
- Harman, N. (1990) *Dunkirk: The Necessary Myth*, London: Coronet Books.
- Hickman, T. (1995) *What Did You Do in the War, Auntie?: The BBC at War 1939-1945*, London, BBC Books.

- Knightley, P. (2000) *The First Casualty: The War Correspondent as Hero and Propagandist from the Crimea to Kosovo (2nd Edition)*, London: Prion Books.
- Mackay, R. (2002) *Half the Battle: Civilian Morale in Britain during the Second World War*, Manchester: Manchester University Press.
- McLaine, I. (1979) *Ministry of Morale: Home Front Morale and Ministry of Information in World War II*, London: George Allen and Unwin.
- Priestly, J. B. (1940) *Postscripts*, London: William Heinemann.
- Pronay, N. (1982) 'The news media at war,' in N. Pronay and D.W. Spring (eds.) *Propaganda, Politics and Film, 1914-45*, London: Macmillan Press.
- Rankin, N (2008) *Churchill's Wizards: The British Genius for Deception*, London: Faber and Faber.
- Stourton, E. (2017) *Auntie's War: The BBC during the Second World War*, London: Doubleday.
- Taylor, P. M. (1999) *British Propaganda in the 20th century: Selling Democracy*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Williams, K. (1998) *Get Me a Murder a Day!: A History of Mass Communication in Britain*, London: Arnold.
- (2010) *Read All About It!: A History of the British Newspaper*, London: Routledge.